友愛人

会報第二十四号
発行日　平成十二年三月二十五日
編集人　南洲吟道会広報局
発行人　理事長　吉永洲神
発行所　〒一六五―〇〇三五　東京都中野区白鷺二―三四―五
㈳日本吟道学院南洲吟道会
☎・FAX　〇三（三三三〇）七〇〇九

家庭を、家族を大切にしましょう

吉永洲神

政治・経済・社会・文化等国民生活のあらゆる分野へ女性が男性と等しく参加することが必要です。／男は仕事女は家庭という固定的な役割分担意識が残っており、それぞれの活動範囲を狭く限ったものとしています。／男女の固定的役割分担を見直し、互いに尊重し協力しあって人間性豊かな社会、家庭を築きましょう。　家庭生活への男性の理解と関心を高めましょう。男女がそれぞれ対等な人間として家庭生活における役割と責任を共に担っていくことは一人の人間としてバランスのとれた豊かな人生を送るために、延いては男女平等な社会を築く基礎として大切なことです。

以上は第35回婦人週間（昭和58年4月10日～16日）に出された労働省婦人少年局（当時の局名。今は婦人を使わない）のリーフレットの抜粋である。

私は、時恰かもこの週間に一吟道と人生一と題して神奈川県政総合センターにて講演する機会に恵まれた。蒐めた資料の中に、夫の定年と同時に「私も定年にして欲しい」と思っている家庭の主婦が三割位いて、実行する人はその内一割位いるとありました。世の中の男性方よ、心して行動しなさい。育ちの違う男女が夫婦になって所帯を持った以上前述のリーフレットのとおり互いに力を合わせることはとても大切なことであり、蓋し当然の事でしょう。出勤途中にゴミを出す・食事の後片付けをたまにはする・掃除もたまにはする等実行すること。ただし「俺がやってやっている」の意識はだめ、「自分の勤めだ」の意識が肝要である。聴衆は皆頷いてくれた。

あれから17年の歳月が流れた今日、「男女共同参画社会基本法」なるものも制定され、女性の地位の向上は著しい。同時に、熟年離婚が増えていると先日のNHKテレビが報じていた。家庭を、家族を大事にしましょう。家族の応援あってこその吟道であってみればこれも蓋し当然の事でしょう。

広島の陸軍幼年学校から復員後、郷里の鹿児島一中に復学した後、家庭の事情で電灯・ガス・水道もない処で約四年間、鹿児島県の菱刈町の山奥で猪や蛭と闘いながらの開拓生活で「吟」が如何に力を与えてくれたか等を交えてお話した。講演を終えて下がろうとしたところ、一一吟やってください。」とリクエストされ、洟れた喉で（水差しの用意がなかった）西郷南洲作一偶感一を吟じ会場を後にした17年前の出来事である。それから二年後、茅ヶ崎市役所社会課からの要請により、同様のテーマで再び講演する幸運に恵まれた。江藤淳著「妻と私」の書が脚光を浴びいてる今日である。

興味深い新聞記事二件を次に紹介します。　（理事長）

夫の退職で息つまる

（平成10年4月27日付朝日新聞ひととき欄より）

六十三歳の夫が、定年退職しました。夫と二人きりでいると、こんなにも生活の雰囲気が変わるものなのでしょうか。

専業主婦の私は、夫を勤めに出した後は、自由気ままに過ごしていました。ところが、夫がいつも家にいると重圧感があり、息がつまりそうな気持ちになってしまいます。例えば「書の練習をしよう」と思って筆をとっても、夫が部屋を出たり入ったりし、そこらを歩かれると気が散ってうまくいきません。テレビやラジオの好きでもない番組にも付き合わなければならないので、「しんどいな」と思います。「今まで、何十年も働いてきたのだから、ご苦労だった。大目に見よう」と思っても、一日の大半を読書で過ごしたり、庭仕事や家事を手伝ってくれたりするくらいでは、物足りなさを感じるのです。

夫は、自分がしたかったことをしているので、今が一番充実しているようです。「たまには、ほかのことをしたら」とすすめても、「これが一番楽しいし、誰にも迷惑はかけないから」といいます。二人で旅行にも行くし、ダンス教室にも通っています。それで十分なのです。夫はいなくても困るけど、ずっといても困る。ぼたん一つで出たり消えたりしてくれないものでしょうか。

やっぱり男の人は、外で働いていないと魅力がありません。そのうち、彼にあった仕事を得て、社会の一員として再スタートする日を夢見いてます。　（仙台市鈴木怜子主婦62歳）

夫は妻を慕いつつ、妻は夫を遠ざける

定年後のつきあい方　意識調査

（平成11年3月9日付朝日新聞）

定年後は「なるべく夫婦で一緒にいたい」という夫と、「別々に過ごす時間も確保したい」という妻。三井ホームが実施した定年後の暮らしに関する調査で、夫婦の意識の差が浮き彫りになった。また、定年後の暮らしに不安を抱いている人が、期待する人の二倍以上になるなど、財政や福祉の先行き不透明さも影を落としているようだ。

調査は昨年十月に実施され、首都圏の40、50代の夫婦約一九〇組が回答し、八日に発表された。

定年後の夫婦の付き合い方について、「なるべく一緒に」という夫は、五〇・三%だったのに対し、妻は二七・四%に留まった。逆に「夫婦別々の時間を作りたい」という「けじめ派」は、夫が四五・五%、妻六二・六%。同社は、「今のうちから、夫婦で取組める趣味などを見つけてみては」と助言している。

定年後の暮らしに期待している人は一七・七%に対し、不安があるという人は四〇・六%だった。不安になる理由（複数回答）は「収入がなくなる」が夫婦とも七割以上を占めトップ。次いで、夫は「時間を持て余す」二二・八%、妻は「いつも夫が家にいる」三六・三%だった。

「初吟会」に参加して

中町会　栗原美洲

今年は㈳日本吟道学院創立二十周年の節目の年ということですが、南洲吟道会の初吟会が一月十六日、日吟会館で盛大に開催された。

森豪神総裁、吉永洲神理事長、吉永龍暘会長をはじめ総勢八十五名の方々が参加され、会場は満席で溢れんばかりの大盛況で、にぎにぎしく始まった。

初吟会で挨拶される吉永洲神理事長

船橋春水さんの祝いの舞があるので中町会は早めに会場に到着した。先着順に受付を通り、一吟ということで緊張しながら出吟順を待っていたが、ふと気がつくと私が吟じようと準備してきた「静夜思」を前の吟者の方が吟じているではないか、どうしょう困った、私が戸惑っていると小泉芳城さんが『入れ替わりましょう』と言って下さり、間一髪同じ吟題が連続せずにすみほっとした。

次は私、目の前に総裁、理事長、会長が着席されており、息が詰まるような緊張であった。とにかく一吟が終わった。一吟しか持ち合わせていなかったことへの怠[illegible]などと、勉強不足を感じ反省させられた。

会場の準備、進行等、大変お[illegible]ておられた諸先生、諸先輩の方々の力強い吟を拝聴し、[illegible]へて前向きに行かなければと力が湧いてくる想いでした。

和やかな楽しい雰囲気の中で来年[illegible]でお開きとなった初吟会、来年もまた楽しみにしていると思っています。

〝和やかだった名人会〟

中町会　木代裕水

この冬一番と言っていいほど冷えこんだ二月最後の土曜日(26日)に、お江戸日本橋亭にて恒例の詩吟名人会が開催されました。会場内は、出演者と応援団の熱気で汗ばむほど。南洲吟道会の応援団は十三名でした。

最初の青壮吟士登龍門コーナーで奈良藍城さんが「常盤孤を抱くの図」にて登場、堂々の吟詠でその役割を見事に果たされました。

この名人会は、他の大会と違い会場内で飲んだり食べたり、応援の声を掛けたりと独特の雰囲気で盛り上がりますが、それも紅白ペア対抗戦で最高潮に……。軽妙な司会に乗り、いよいよ女性軍から。

南洲吟道会は、平松玉城さんが自信に満ち溢れた「弘道館にて梅花を賞す」を披露。集計主任を勤められた龍暘会長先生が、「審査員の先生から実質上の最高点を付けられた」とソッと打ち明けられた程の素晴らしい吟でした。

男性軍では、佐藤廣水さんが「偶感」で出吟。昨年末から風邪のため二ヵ月間声が出なかったというアクシデントに見舞われながらも、それを超越して力強く吟じられました。惜しくも入賞を逸したものの、お二人の吟は満場のお客様に南洲吟道会の底力を印象付けるものでした。

後半の「名人競演」では、菊田正祥さんがベテランらしい重厚な味わいで「天意を知れ」を吟じられ、我らが洲神理事長先生の「東照公遺訓」の名吟を〝取〟として、楽しかった名人会はお開きとなりました。

名人会終了後の慰労会も、和やかな雰囲気の中に来年の名人会へ向けての精進を誓い合い美味しいビールを頂きました。

加藤杏洲さん、第三十五回日本吟道青少年全国大会にてみごと優秀賞に輝く!!
そして吉永家はほのぼのファミリー賞を受賞

驚きました。さすが南洲吟道会は日本一!

第三十五回日本吟道青少年全国大会にて、加藤杏洲さんが「平敦盛」を吟じ、吟詠部門の優秀賞を受賞しました。三月十九日、東京・ムーブ町屋ホールにて開催された青少年全国大会は、全国各地から多数の青少年がこの大会に参加し、若いすがすがしい吟声が会場一杯に響き渡り、大人の私達の心を洗い清められるような大会でした。

当会からは菅野桜吟さんも出場され、〝うまい!〟と多くの先生方にお褒めの言葉をいただきました。

佐藤向勝先生の剣舞の指導のもとに松蔭学園の三名の乙女が立派な舞を披露され、みごと早乙女渚さんが剣舞部門の最優秀賞を受賞されました。そして、何よりも花を添えてくださったのは、吉永忠嗣ちゃんを中心に理事長・会長両先生ファミリーが「汪倫に贈る」を吟じ、ほのぼのファミリー賞を受賞されたことです。小さな忠嗣ちゃんを見守りながら、心配そうに吟ずる両先生のお優しいお人柄が伺われ、心暖まる舞台でした。

青少年の皆様、輝く未来に向かって益々頑張ってください。

(広報局)

「汪倫に贈る」を吟じる、吉永両先生とお孫(忠嗣)さん

創立二十五周年記念大会　華やかに開催

児玉智龍

早いもので、あれからはや四ヵ月余りの月日が流れた。感激の本会創立二十五周年記念大会は、サブタイトル『相想う人間の情愛』と銘打って好天に恵まれた十月三十一日（日）中野ゼロホール（小）で賑々しく開催された。大ホールが取れなかった恨みはあるものの、コンピューターを駆使してやっと採って下さった龍暘会長に先ず感謝したい。

オープニングで「何かやるな」と察知されたらしいお客様が、早朝より大勢詰めかけられ、早々に会場はほぼ満席となる。

幕が上がる途端「ワーッ、きれいっ」と場内から歓声が上がる。奥傳までの女子約五十名が、さながらファッションショー宜しく、色とりどりの和服を着飾って舞台狭しと半円形に並ぶ。中央には三人の草月流の先生方が「祝賀の詞」の大合吟にのって生け花を活けて下さる。実に壮観である。拍手の先生から「歌舞伎を観ている様です」また「香りが漂って来る様ですネ」との評を頂く。心のなかで思わず快哉を叫ぶ。

橋本清龍実行委員長の厳粛な開会の辞にセレモニーは始まる。嘆かわしい現在の社会情勢に一石を投じる意味で洲神理事長が「相想う人間の情愛」の特別番組を組まれた所以を説かれる。「そうだ、正にそのとおり。吟道を通じて、私共は少しでも世直しに尽くしたい。」そう思うことしきりである。

第一部「中国詩を詠う」では、独吟・合吟が続く。なかでも構成吟、いずみ会の「月下独酌」は泉洲流宗家山内泉洲先生振付になる群舞がついて、中町会の「呉越興亡のあと」は、企画構成小泉泰龍中町会会長、ナレーション岩坪博秀顧問（90歳）、坂東流坂東三弥登先生振付の舞、一舩橋春水さん（80歳）、西谷邦城さん」、佐藤恵城さんの書、それぞれ趣向を凝らしたもので立体的に演じられ大好評であった。

第二部「人の心を詠う」の合連吟は、何れ劣らぬ熱吟であり人生の心の糧にすべき題材で感銘を受けた。

第三部賛助吟詠、第四部フルート演奏と続き昼食休憩をはさんで式典となる。松本龍江実行副委員長の司会により式典が始まる。

森豪神総裁から「全国に名声を博する南洲吟道会の発展は、本学院の発展を意味します。」等ご懇篤な祝辞を頂く。感謝!!　総本部から洲神理事長への感謝状贈呈があり、岩坪顧問からは「敗戦後の米国占領政策を打破して早く日本人本来の姿を取り戻すには吟道が最も相応しい」等ご高説を拝聴し深い感銘を覚える。引き続き本会功労者と永年勤続吟詠者の表彰が行われ、意義ある式典を終える。

第六部会員吟詠記念番組では、洲神理事長の陸軍幼年学校同期生・副島岳峰居合道八段剣士による居合と、奥傳までの男子40名の合吟に乗って不動智心流剣舞道谷津鐵州宗家の「本能寺」の勇壮な剣舞が披露された。男子の整列態度はまた一段と素晴らしく剣舞の迫力に勝るとも劣らぬ大合吟であった。

居合の「静」と剣舞の「動」とが織り成す名場面であった。

第七部賛助吟詠は、六団体の吟友の皆様の合吟であり、第八・九部は、「日本の風土、歴史を詠う」と会員の名吟・熱吟が続く。第十部会長等吟詠は、龍暘会長の短歌「行く川の」を始め本会役員の名吟であり、九十歳を迎えられる岩坪顧問の吟詠は心に残るものであった。

第十一部招待吟詠では、八名の先生方の名吟があり、中でも[illegible]龍成札幌吟道会会長が「ありがとう」の吟の中で「吉永先生ありがとう」と吟じられたのは印象的で会場から自ずと拍手が湧いた。

第十二部は、待望の会員吟詠記念番組「相想う人間の情愛」である。メインテーマとしてこの一年間取り組んできた成果を発表するのである。胸の嵩まりを覚える。

「山紫に水清い私達の祖国日本の二千六百有余年の歴史、文化の中で育まれた日本固有の吟詠の道。吟道を歩みながら日本古来の精神を学びとり、より芸術性の高きものへと、私達は日夜研鑽を積んでいるものでございます。この世の中で親子、夫婦、人。互いに「思いやり」の心ほど大切なものはありません。本学院の教本の中から、特にこれらに因んだものを選び構成吟「相想う人間の情愛」と題してお贈りします。」小泉泰龍理事の暖かく流暢なナレーションに始まり、吟と舞が一体となり名場面が次々と演じられていく。静山流・神宗流・静心流・神明鍛心流・泉洲流の各舞の先生方が錦上華を添えて下さる。青木泰城外五人の皆さんの麗しいコーラスは荒井鳳龍・中島昭祥お二人のハーモニカ伴奏

25周年記念大会・オープニング「祝賀の詩」大合吟

と相俟って聴衆の心を揺する。番組の掉尾を飾って福元松蓬外の皆さんの薩摩琵琶と宮武花野子さんの篠笛の伴奏が織り成す「石童丸」は洲神理事長と龍暘会長の吟にのって若竹流宗家若竹三千夫、同代範若竹三千弘両先生が舞う、父を慕い子を想う悲しい物語に満場は涙した。「私達は、思いやりの心を大切にこれからも生きていきます。」湊山冴祥研修部次長の格調高い寂のきいたナレーションが番組を締めくくる。幕が降りると会場は割れんばかりの拍手が暫し鳴り止まない。「よかった。素晴らしい。成功だ」そう思ったのは私一人だけではないでしょう。

総本部役員の名吟に続いて森豪神総裁の「だまっているだけ」の吟詠を最後に本大会の総べての演目を終了した。

会員から寄せられた二十五周年記念随筆集も出来上がり本会は益々心をひとつにして二十一世紀も吟道に精進することを誓います。総本部役員の先生方、吟友の皆様の暖かいご支援に感謝しながら大会のご報告といたします。（広報部長）

25周年記念大会「本能寺」大合吟と剣舞

25周年記念大会の埴輪を飾る「石童丸」を演ずる理事長、会長先生と他の皆さん

理事長先生
会長先生

詩歌投稿

寄レ創立二十五周年記念大会

脇　成城　作

聲氣堂堂満座時
春秋五五感弥滋
吟来今古先賢賦
精励更重報両師

聲氣堂堂、座に満つるの時
春秋五五、感、弥滋し
吟じ来たる今古、先賢の賦
精励、更に重ねて両師に報ぜん

（上平声四支韻）

。春秋五五＝二十五周年を言う

献レ岩波芳龍先生霊位

脇　成城　作

百歳長生竟不全
幽明相隔恨綿綿
弔吟韻律悲傷切
懐慕芳龍霊位前

百歳の長生竟に全からず
幽明相隔つ恨み綿綿
弔吟、韻律悲傷切なり
懐慕す、芳龍霊位の前

（下平声一先韻）

岩波芳登君を偲んで

橋本　清龍

平成十一年九月二十八日、元陸軍士官学校の同期生であり、私の詩吟教室の一員として共に情熱を燃やした同志・岩波芳登君が逝去された。誠に痛恨に堪えない。

岩波君と私とは、兵科は同じ歩兵であったが、士官学校では予科・本科を通じ中隊・区隊を異にしていたので、戦後も全く存じ上げなかった。

それが、平成元年私が一念発起して八王子に詩吟教室を開く決心をし、同期生名簿等を頼りに会員募集を行ったところ、真先に応募してこられたのが岩波君であった。

そして十数名の希望者を得て、建国記念日の翌日発会式を行ったのが君とのはじめての出会いであった。

爾来君は月三回の私の教室での練習には殆ど休まれたことなく、また春と秋の昇段審査や、所属する南洲吟道会の大会や研修会、更には総本部主催の全国大会や夏期吟道大学講座などにも積極的に参加し吟技を磨かれた。

君が如何に詩吟に打ち込んでおられたかを証するエピソードがある。それは平成三年の夏、君は胃ガンの手術のため、八月中旬東大付属病院に入院手術されたが、九月下旬にはもう詩吟教室に出て来られ皆を驚かせた。

このような君のひたむきな詩吟へのご精進・努力が実を結び、平成八年には「師範」を取得し、九年二月には、全国大会での推薦吟者を選出する関東地区決定会で見事第三位（壮心の部）入賞の成果を挙げられ、平成十年十一月「皆伝」に昇段された。

また、平成五年六月だったか、千鳥ケ淵戦没者墓苑におい

て、サイパン島で玉砕された名古屋の第百四十三師団戦没者の五十回忌慰霊祭が、かつて該師団れい下部隊に隊付勤務した陸士五十八期生有志の奉仕で行われたが、その際、私と共に君はサイパン島慰霊の詩を献吟奉仕された。君が隊付した岐阜の連隊もサイパン島で玉砕されている。

いつぞや君は御家族と共にサイパン島に旅行され、後日私に「バンザイクリフに涙あり」というテープを持参され、サイパン島旅行のお話を伺ったことがあったが、それは単なる観光ではなく、まさに慰霊の旅であったことに深く感動させられた。また一昨年、私達広島陸軍幼年学校創立百周年記念総会が、新宿の京王プラザで行われた時は、君に特にお願いして上村顧問と私と三人で「嗚呼硫黄島」の詩を連吟していただいた。

このように詩吟を通じて君と共に英霊に奉仕し慰霊の微衷を捧げ得たことは、お互いに詩吟冥利に尽きる想い出となった。

[illegible]のお話によれば、君は昨年十一月、腸閉塞の手術をされ、爾後十一月余にわたり一切の食事を口にされたことなく、ただ点滴のみで生きてこられたが、その苦しい闘病の日々、折にふれてこれ一つの詩を静かに聞かれることが多かったとか。

某詩吟の大先輩の詠まれた和歌に、

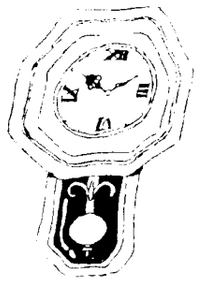
「究むるに学ぶに遂に玉の道
　枯れて散るまで磨かつくさん」

という歌があるが、岩波芳龍ここにこの道の実践者・求道者であったと思う。

この度、君の訃報に接するや、吉永理事長は直ちに総本部に叙位をお願いせられ、「秀伝・諱号」が認証せられ、「秀伝・岩波芳龍」の額が斎場に飾られた。

そして告別式には吉永理事長をはじめ南洲吟道会の同志約二十名が参列し、岩波芳龍先生の御霊安かれと謹んで「弔吟」を奉誦させていただいた。謹んで君のご冥福をお祈り申し上げます。

（八王子南洲吟道会会長）



その後の西郷どん（その三）
―体をあげ申その決断―

上村　健二

大久保、川路の策謀により一月二十八日から鹿児島草牟田の陸軍火薬庫の移転搬出が始まった。これを知った私学生徒五十余名は一月二十九日火薬庫を襲い弾薬を奪い私学校に運んだ。政府の誘いに乗ったというところである。襲撃は二月二日まで続き約千名が参加した。この頃西郷は大隅半島の小根占で兎狩り中であったが、二月一日末弟の小丘衛次で辺見十郎太がやって来て火薬庫事件と西郷暗殺意図を報告し、一刻も早く鹿児島に帰るよう懇願した。そのとき西郷は「しまった」と叫び、二月三日武村の自宅に帰った。家には、相野、篠原、村田、別府等が集まり一座は殺気に満ち西郷の決断を迫った。西郷は「おはんたちは何たることをしでかしたか」と大声で叱りつけた。嫡男菊次郎は隣の部屋でその大声を聞いていた。しかし県下の私学校生徒等は既に剣槍などで武装を固め続々と学校に集まっていた。西郷は三、四日自宅から一歩も出ず沈思していたが二月五日午後私学校本部に入った。そのときの西郷は一千余の愛弟子が実につまらぬことをしでかして暴走となり斬罪に値する重罪を犯しているとは……」と心は乱れに乱れ、五十年の人生は運命に裏切られたと諦めていた。そして「…王を尊び民を憐むのが学問の本旨であるのに、一時の感情で市井の暴徒と化しては私学校の誇りも地に落ちたというものだ。国土の起つときは皇国存亡興廃のときである。警察の探偵にしても彼等が何を供述したか知らんが、天下国家の安危にかかわることではあるまい」と説得して蹶起に反対した。西郷は刺客問題など個人の問題で起ちたくなかった。しかし既に火薬庫を襲っている子弟を自ら縛るか、政府の捕縛に委せるか、このままでは法の建前上鎮圧の兵力が差し向けられるのは必定である。容易に決断を下し得なかったが評定三回桐野・篠原等は「この上は先生を擁して死中に活を求めるのみ」と訴え「我々は既に政府の陥穽（おとしあな）に落ち込んでしまいました。どんなに辛抱しても政府は我々を瓦解させようとしています。皆の申すところは、先生は我々を見殺しにはなさるまいということです。」と涙声で訴えた。西郷はついに「そいては大義名分は別として、俺（おれ）どんの体をおはんたちにあげ申そ」と云った。この一言で蹶起は決定した。明治十年二月五日のことである。あちこちですすり泣きの声が起こった。

私学校幹部は学校の壮士に引きずられ西郷は私学校幹部に引きずられたのであった。西郷の胸中は「中原一味のことは自分一身にかかわることで、わしの生命はどうでもよか、だが私学校を潰すの、県政と私学校の関係を切るのとの論議や策謀はやはり糾しておかねばいかん」というものであった。

この頃竹馬の友、大久保は仕掛けたワナに西郷以下が引きかかってくるのを待っており、伊藤への手紙に「…もし干戈と相成り候えば名もなく義もなく…正々堂々その罪を鳴らし…これを討伐せば誰かこれを悶然とするものあらん…ひそかに心中には笑を生じ候」と述べ西郷が陥穽に引きかかってきたことを嬉しがっていた。

西郷は決意を述べた上で「政府に尋問の筋これあり、兵を集めて上京したい」と県庁に申し入れた。この頃明治天皇は川村中将と林友幸を海路鹿児島に派遣して情況を確認させようとし、二人は二月九日鹿児島港に着いたが暴徒のため上陸できず、大山県令が乗艦して川村と会見した。しかるに暴徒は艦を奪おうとしたので二人は急遽帰還した。天皇は西郷の蹶起を聞かれて深く憂慮され二月十七日有栖川宮を勅使として西郷慰諭を命ぜられたが薩軍の佐敷（地名）進出を聞かれ中止された。大久保は自ら赴いて西郷を説得しようとしたが三条に反対され、自ら征討総督を請うたが天皇はお受けにならず、有栖川宮を総督として征討令を発せられた。参軍（司令官）は、陸は山県、海は川村であった。この二人とも西郷に私淑し理解していることを天皇は御承知になり、又西郷の心情を深く御理解ご宸念の上のことであった。

山県は蹶起に当たっての西郷の心情について後に城山攻撃に当たっての降伏勧告の手紙に「…止むを得ざる勢いで決して君の素志でないことはよく判っている…事の間違いを百も承知の上で遂に壮士たちの上に奉ぜられ…君は最初から自分の生命を壮士たちに与えようとしたにほかならず…人生の毀誉を度外視し天下後世の論議にも敢えて省みようとしなかった…ああどれ程深い悲しみを心の底に秘めて…」と述べている。又福沢諭吉は西郷と面識は無かったが「丁丑公論」において「彼のことは真に憐れむべくしてこれを死地に陥れたるものは政府なりと云わざるを得ず」「西郷を評して賊と称するは何ぞや」「…未だ日本に政府あらずと云うべし」と評している。

（本会顧問）

本部だより

一、正会員七十名となる

次の方々が平成十二年度正会員となられます。

石井　文龍（鷺宮）　　高橋　登龍（鷺宮）
伊藤　和城（龍暘会）　　小泉　芳城（中町会）

ご協力ありがとうございます。

二、新入会員ご紹介

どうぞよろしく

☆佐藤チヨ子（いずみ会山内教場）
会員No.六二七（11・7・23付）
〒一八五－〇〇三二　国分寺市日吉町一－一－八三
☎〇四二－三二二－〇四一一

☆近藤ツイコ（国分寺教場）
会員No.六二八（11・9・16付）
〒一八五（〇〇〇二）国分寺市東戸倉二－三－四七
☎〇四二－三二四－七八三三

☆大庭　巌夫（瑶洋教場）　会員No.六二九（11・10・1付）
〒一九三（〇八三二）八王子市散田町三－一六－二四
☎〇四二－六六二－六一六〇

☆加藤　杏洲（紀子）（熟年教場）
会員No.六三〇（11・10・20付）
〒二二九－一一一六　相模原市清新五－二－一－六一一
☎〇四二－七七二－三二四四

☆望月みどり（国分寺教場）会員No.六三一（11・11・19付）
〒一八五－〇〇〇二　国分寺市東戸倉一－一九－一一
☎〇四二－三二二－九六五五

☆勝又　とよ（国分寺）　会員No.六三二（12・2・4付）
〒一八五－〇〇〇二　国分寺市東戸倉二－三－六四
☎〇四二－三二三－二一四九

☆稲垣　和男（中町会）　会員No.六三三（12・3・1付）
〒一五八－〇〇九一　世田谷区中町五－八－一三
☎〇三－三七〇二－七七二九

習志野会小田代教場発足、おめでとうございます。
次の方々が入会されました。弥栄をお祈りします。

☆樋口　勝之（習志野会小田代教場）
会員No.六三四（12・4・1付）
〒二七五－〇〇二六　習志野市谷津四－八－二－三〇九
☎〇四七－四五三－一六一八

☆持永聖流美（習志野会小田代教場）
会員No.六三五（12・4・1付）
〒二七五－〇〇二六　習志野市谷津三－一－四四
☎〇四七－四五二－七三三四

☆伊藤　光男（習志野会小田代教場）
会員No.六三六（12・4・1付）
〒二七五（〇〇二六）習志野市谷津四－六－二八
☎〇四七－四五一－一七七七

☆成田　史武（習志野会小田代教場）
会員No.六三七（12・4・1付）
〒二七五（〇〇二六）習志野市谷津一－三－一五－四〇二
☎（〇）四七　四七九－三二五一

三、住所等変更

（お手持ちの名簿を修正して下さい）

1　富沢　富龍　鷺宮教場から龍暘会第二教場へ移籍
〒三五〇－〇二四二　坂戸市厚川六三－一
ブラッシュ一本松二〇五
☎〇四九二－八二－六三〇二

2　古屋　秋城（習志野会）
〒二七五－〇〇二六　習志野市谷津三－一二－二二
秀和レジデンス二一二
☎〇四七－四五一－三七四二

四、第40回全国大会（5月21日）について

今年の春季全国大会は、大宮市のソニックシティーホールで行われます。本学院創立二十周年記念大会と銘打って特別の内容が予定されています。

お蔭様で、本会は女子四十四名、男子三十一名の参加を頂きました。合吟コンクールには、長友瑶龍・伊藤和城・奈良藍城・内山陽城・角野明城の皆さんが出吟されます。ご声援下さい。

1　10年以上の継続正会員表彰

吉永　洲神・吉永　龍暘・大渕　龍生・新谷　紫龍
西本　龍秀・橋本　清龍・小泉　泰龍・鈴木　美龍
佐藤　勝龍・橋本　龍祷・有坂　煌龍・荒井　鳳龍
岩井　絢龍・加藤　孝龍・小林　政龍

2　指導歴10年以上で会員5名以上の指導者表彰

吉永　洲神・吉永　龍暘・松本　龍江・橋本　清龍
岩井　絢龍

3　皆伝以上の高齢者特別表彰

(1)　ダイアモンド彰（90歳以上）
岩坪　博祥・新谷　紫龍
(2)　ゴールド彰（85歳以上）
高橋　愛龍・小林　政龍
(3)　シルバー彰（80歳以上）
菊田　貞龍

4　その他、10年以上の総本部役員、10年以上の認可団体代表者、10年以上百名以上の認可団体等の表彰が行われます。（総本部へ報告済み）
おめでとうございます。

（広報局）

五、平成12年度温習会　日程・会場決定

平成12年11月に温習会を予定しておりましたが、会場の都合で年を越し、次のとおり決定しました。
平成13年1月14日（日）・中野区野方区民ホール

六、平成12年度総会　日程・会場決定

平成12年5月3日（祭日）
午前…総会　　午後…研修会
中野区鷺宮地域センター3階ホール